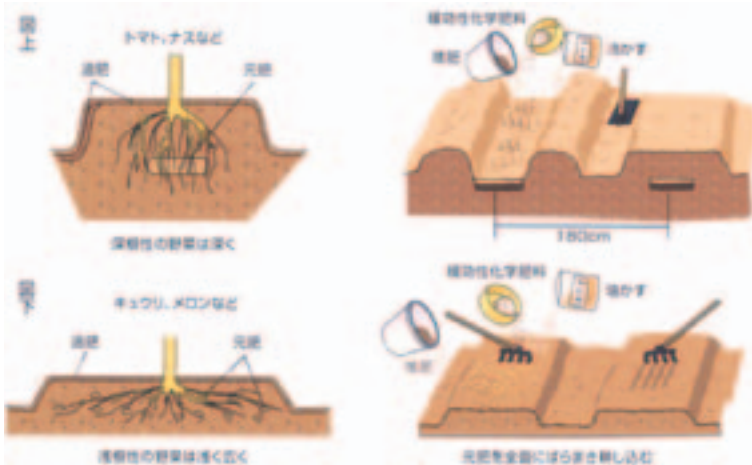


作付け前の畑の準備



桜咲くころともなれば春夏作野菜のための畑作りの始まりです。野菜の生育に適した畑土は、(1)水はけが良く適度の空気を含んでいること、(2)水持ち(保水力)が良いこと、(3)土壌の酸度(pH)が適正であること、(4)病原菌や害虫がいないこと、(5)肥料分に富むこと、などです。(1)~(4)は耕起と堆肥の施用、(5)は上手な施

肥によって達成できます。石灰を全面にばらまき耕しておいた畑に、十分な堆肥が確保されているなら早めに畑全面に堆肥をまいて20センチ程度の深さによく耕し込んでおきます。

庭先や小さな市民農園では1区画制にせざるを得ませんが、2~3坪以上の菜園なら3~4区画に分けて作付け計画を立て、同一種類が連作にならないようにし、土壌病害の伝染や害虫(主にネマトード)を未然に防ぐことが大切です。

種まきまたは定植の半月以上も前に元肥を施しておきます。そのポイントは「作付け開始後では与えることのできない根域の土層に、根がしっかりと張り、肥料分が長い間効き続けるような性質の堆肥と肥料を与える」ことです。野菜の種類ごとの根の張り具合をよく知って、元肥を施す位置を決めましょう。

果菜類の場合、図に示すようにトマト、ナス、ピーマンなどナス科のものは、根が深く、縦型に伸びる性質があるので、畝の中央に深く溝を掘って、主要な根が深く張るよう導きます。こうすれば土壌の乾湿にもよく耐え、草勢が長く保たれ、果実の発育障害を少なくすることができま

す。緩効性の化学肥料などをその上にはばらまいておきます。

その後すぐに、溝状の場合(図上)には土を埋め戻し、大まかに畝を作りますが、低湿地では排水のことを考えて高めにしておきます。畝全面の場合(図下)には半月ほどたってからもう一度耕し、肥料を土になじませます。

「JA版農業電子図書館を」つかってみよう!!

当JAでは、病害虫や雑草、農業など生産に関する情報が簡単に検索できる、タッチパネル式の情報端末「JA版農業電子図書館」を窓口相談機能の充実と、迅速な指導や最新情報の提供等、組合員サービスの向上を図るため、営農施設に設置しています。

皆様のご利用をお待ちしております。

*設置店舗：総合営農経済センター
片貝営農センター
千田園芸資材センター



病害虫・雑草診断など簡単に操作できます!!
探したい項目を指でタッチ!!

板木技術士事務所
●板木利隆